

『妖怪百物語・続妖怪百物語』

京極夏彦著／角川書店／1999 年版＝1900 円＋税 2001 年版＝2000 円＋税

底抜け柄杓で水を汲む？

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

今、自分の置かれた環境に不満があるわけではない。若い頃のように輝く明日を夢見ることこそできないけれど、そのかわりに平穏無事な毎日が過ぎていく。そこそこに幸せな日々。だが、平穏な日々は中途半端だ。だから、私は途方もない裏の顔を平凡な表の顔で包み込み涼しい顔で市井に溶け込んでいる人々の物語を憧れをもって読む。

かの有名な「強くなければ生きてはいけない。優しくなければ生きていく資格がない」という飲んだくれ探偵フィリップ・マローウの科白を持ち出すまでもなく、彼らは無口で、冷静で、頭がよくて、鋭い勘をもち、強くて、ストイックでありながら、優しく、特殊な技能があり、おまけにいつ「死」に出会っても不思議ではない世界で淡々と生きていく。完璧だ。

さて、本書である。『妖怪百物語』はかなり前に出版されていたのだが、ハードカバーで持ち運びに不便なので、しばらく本棚にしまいこんだままになっていた。しかしつい最近、続編が出版されて、週刊文春のミステリーレビューで五つ星に輝いた。これは読むしかないだろう。幸いなことに私の通勤時間は2時間余、下り電車なので、必ず座れる。少々重くても大丈夫。というわけで読み始めたところ止まらない。

表紙裏に「人の世に凝るもの。恨みつらみに妬みに嫉み、泪、執念、憤り。（中略）所詮浮き世は夢幻と、見切る憂き世の狂言芝居。身過ぎ世過ぎで片付けましょう。仕掛けるは小悪党、小股潜りの又市、山猫廻しのおぎん。事触れの治平——。（後略）」とあるように、大きな悪に立ち向かうのは、いわゆる市井の善人、凡人で

はない。陽の当たる表の世界で、可もなく不可もなく、自分の世界を守ることだけに汲々として、ふらふらとどっちつかずの生き方をしている私のような人間ではなく、「真っ当に闇に浸って生きている」人々なのである。彼らが悪と対するときの仕掛けの丁寧さ、緻密さもさることながら、いま、このときを真剣に生き切る姿勢が見事だ。

だからこそ、そこそこに散りばめられた彼等の言葉の数々が重みをもって迫ってくる。「幸せなんてものはね先生、どっかにぼっかり浮かんでるものじゃねえや。今ここにあるもんですよ。ただ、それを幸せと思えるかどうか——ってことでしょうよ」これは又市の科白だ。生臭坊主良順は「何をするにも決心するゆうのは難しいものや。誰かに決めて貰うのは何より楽やし、選ぶ道が減ればそれも楽になるわいな」という。「人生なんてサ。おまんま戴くために働いているんだか、働くためにおまんま喰うのかサ、時偶判らなくなるじゃないか。みんな底抜け柄杓で水汲んで満足しているようなものなのかもしれないよ」おぎんの言葉だ。極めつけは「この世はみんな嘘ツ八だ。その嘘を真実と思ひ込むからどこかで壊れるのよ。かといつて、目エ醒まして本物の真実見ちまえば、つらくって生きちゃ行けねえ。人は弱いぜ。だからよ、嘘を嘘と承知で生きる、それしか道はねえんだよ」という又市の言葉だろう。

それしか道はないから、私はこれからも程よい加減に自分をだましつつ、ふらふらとどっちつかずの生き方をしていくのだろうか。嗚呼……。



さかた・みよし

この4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ……。寢室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374